

『開卷驚奇俠客伝』と『三国志演義』

三 宅 宏 幸

曲亭馬琴は文化年間に『燕石雜志』（文化八「二八一—」年刊）、

文政初年には『玄同放言』（文政元「二八一—」三年刊）といっ

た考証隨筆を、天保初年には、「水滸後伝国字評半閑恣談」（天保二

「二八三—」年成立）や「三遂平妖伝国字評」（天保四年成立）など

の中国白話小説批評を著述する。馬琴の考証・批評の正否はさてお

き、これらの営為は、馬琴の作品に影響を及ぼしていないのである

うか。様々な書籍・資料・伝承を基にした馬琴の考証や、白話小説

を熟読して獲得した小説作法は、読本において有効に機能している

のではないか。こういった観点からの馬琴読本の調査は、いまだ十

分ではないように思われる。

本稿では、『開卷驚奇俠客伝』（天保三—六年刊）に『三国志演

義』と『開卷驚奇俠客伝』と『三国志演義』

義』の趣向利用が見えることを指摘した上で、『三国志演義』の本
文・注釈・評、馬琴自身の考証・批評などをふまえて、『三国志
演義』利用が『俠客伝』でどのように機能するのかを考察する。

『俠客伝』は後南北朝時代を背景とし、楠正成や脇屋義助などの
子孫たちが南朝遺臣として活躍する史伝物読本である。従来、馬琴
が「南北正閏順逆の理を正しく」とするという『俠客伝』の大意を自
解したことを受け、徳田武「馬琴の稗史七法則と毛声山の『説三国
志法』——『俠客伝』に即して「隱微」を論ず——」^②が、毛声山・
宗岡父子の批評や註を付した毛注本『三国志演義』所収「説三国志
法」に、その理念を学んだと論じた。だが、『俠客伝』に『三国志
演義』の趣向を利用したかには触れておらず、馬琴読本と中国小説
との関連を整理した崔香蘭氏も、『俠客伝』の項に『三国演義』の
書名を記さない。しかし、他の先行研究で、既に『三国志演義』の

趣向との関連は推測されている。まずは、その箇所を見ていくこととしたい。

なお本稿では、馬琴が少なくとも毛注本『三国志演義』、『新刊京本校正演義全像三国志伝評林』（馬琴旧蔵・現早稲田大学図書館蔵）、『通俗三国志』（湖南文山作、元禄二「一六八九」年序）など、数種の〈三国志演義〉を閲していることを考慮し、テキストを一つに限定しないために〈三国志演義〉と表記することとする。

二

『俠客伝』と〈三国志演義〉との関連について、麻生磯次「展開的考察」^④は、「小六丸が主君右少将の梟首を奪ひ取らうとして暗夜に途を失ひ、困じ果ててゐる所へ、数多の螢現れて路を照らす場面があるが、これも三国志演義で、漢の天子が逆賊を避けて、陳留王と共に蒙塵する一節に拠つたものであらう」と推し、日本古典文学大系60・61『椿説弓張月』（岩波書店）の頭注（後藤丹治注）も、『俠客伝』の螢の場面と〈三国志演義〉との関連に触れている。にもかかわらず、新日本古典文学大系87『開卷驚奇俠客伝』（岩波書店）の後注において、両作品の関連は明記されず、等閑視されている。これは、両作品の細かい比較や、その趣向を用いた意図についての検証が為されていないためであろう。

そこで、麻生論文が推測した場面を検証し、関連を確定する。『俠客伝』第一集卷之二、脇屋義隆の实子小六丸は、養父館英直の機転により、南朝遣臣の藤沢郷士、野上史著演の館に落ち着く。小六丸は主君（実は実父）の義隆が、藤白安同に急襲され討ち死にし、由比ヶ浜に梟首されていることを聞く。義隆の首を奪ひ返すため、夜半に一人で館を抜け出して、由比ヶ浜を目指す^⑤。

五月の天の癖なれば、降みふらずみ定めなき、如法闇夜に辿る^①も、嚮に聞しを心当に、鎌倉を投て急げども、人家離れては田に畔に、枝道さへに多かれば、去向は右歟左歟と、思ひ難つ、停在て、せん術もなき折から、叢蔭より忽然と、許多の螢群飛て、小六丸の身辺に来つ、^②路を照らし先に進て、這身の為に郷導を、做す歟と見えて奇なるかな。車胤が夜学の灯火に、易きといふ故事は、人作にして自然にあら^③ず。此は是童子の忠孝を、神明仏陀の相憐みて、怒る冥助を^④錮ひけん。小六丸は今この奇特に、感歎しつ、些も礙せず、螢の進むに従ひて、只管に走る程に、……果して由比の浜に^⑤来にけり。

（第三回）

本場面の特徴として、以下の四点をあげることができる。①真夜中で道が分からず、田や枝道で道も悪い、②忽然と無数の螢が小六丸の周りに集まる、③無数の螢は道を照らして小六丸を誘う、④小

六丸の「忠孝」に対する、「神明仏陀」の冥助である。

では、『三國志演義』の場面を見る。馬琴が毛注本『三國志演義』を閲読していたことは書翰などから確認できるが、内容の理解し易さを勘案し、『通俗三國志』も以下に示す。

漢末期、悪政の元凶である宦官十常侍が將軍何進を殺害したことで、何進配下の袁紹らが宮中になだれこむ。十常侍の張讓と段珪は少帝と陳留王を連れて逃げるが、追っ手に見つかり、張讓は河に身を投げる。少帝と陳留王は草の下に潜む。毛注本『三國志演義』第三回「議温明董卓叱丁原 餽金珠李肅説呂布」を記す。

陳留王曰。此間不可久戀。須別尋活路。于是二人以衣相結。爬上岸邊。滿地荆棘。黑暗之中。不見行路。正無奈何。忽有流螢千百成群。光芒照耀。只在帝前飛轉。〔割註〕炎倒之勢昔如日月。今為螢光火德衰矣。陳留王曰。此天助我兄弟也。遂隨螢火而行。漸漸見路。

『通俗三國志』卷之一「董卓起兵入洛陽」には、

〔陳留王は〕論者補 帝の御衣を我衣と結び合せ草を分けて出玉ふ。目ざすとも知らぬ暗き夜に、荆棘路に満ちたりしかば、御足も傷れ損じて、進むべき様無ししかば、天を仰て泣き泣き玉ふ所に、不思議や数万の螢、何処ともなく飛集まり、光を放つて、帝の御前に来りける。陳留王大いに喜び、「是天の助

なり。これを指南に出候はん。」とて、螢火に道を引かれて、漸に歩み出玉ひ、是こそ人の通ふ山路と、思布処まで出て、

(巻之一)

とある。丸数字が交錯するが、①暗い夜、先に進むことができない、②数万の螢が、帝の前に現れる、③螢火に道を誘われる、④螢が現れたのは「天の助」である、とまとめられる。「五月」と「八月」とで時期の違いはあるが、闇の中で道に迷う点、無数の螢が少年を誘う点、その現象が「神明仏陀」や「天」という人智を超えた存在の冥助である点が、『俠客伝』と『三國志演義』とで共通する。

さて、『椿説弓張月』(文化四一八年刊)に、「折しもあれ一団の燐火、叢の中より燃出て、手元を照らす」(第廿九回)と、朝稚が闇の中で文字を書こうとしたとき、「燐火」が手元を照らす場面がある。この場面の後藤頭注には、「このおにびに導かれて志す所に至る趣向は、俠客伝第三回、八犬伝第六十四回にも応用されているが……共に三國志演義第三回、十常侍の乱のため、少帝と陳留王とが螢火に導かれて落ち行く条によるか」とある。『南総里見八犬伝』(文化一一一―天保一三年刊)の該当箇所は、「忽然として一団の陰火目前に燃出つ、先に立つ、現八を、導くごとく隠々と、閃きてゆく」(第六十四回)である。闇の中で困惑している折に、「燐火」「鬼燐」が周りを照らすこれらの趣向は、『三國志演義』から借

りたと考えてよからう。

ただし、『弓張月』や『八犬伝』では「螢」から「燐火」「鬼燐」と変更されるが、『俠客伝』では「螢」をそのまま踏襲するという違いがある。さらに、『俠客伝』の本場面は、馬琴自身が「八犬伝九輯再評・俠客伝四輯評」に、「俠客伝金閣の仇討の段のごとき、先づその趣向を考得て、扨この処は螢狩りにして、前輯小六が夢に螢火の闇夜を照らす照応にせん、と思ひて綴り候事二御座候」と記しており、楠姑摩姫が足利義満を金閣寺で暗殺する箇所を、本場面の「照応」としている。このことを見ると、馬琴が「螢」を『俠客伝』の重要な要素として意識していたと判断することができる。

「螢」を用いて、幻想的な場面に仕上げることも一つの狙いであろう。しかし、それだけの理由であれば、『弓張月』『八犬伝』のように「燐火」「鬼燐」でも構わないし、姑摩姫の仇討ちの「照応」にするほど、印象に残らないのではないか。

ここで論者が着目するのが、考証随筆『玄同放言』における記述である。馬琴は、本場面に登場した陳留王について、『玄同放言』巻二「漢火生剋應験弁」に、次のように記す。

○魏土は漢火に勝といふとも、乾燥も亦甚し、火徳はじめて滅て、焦土馬蹄に揚らる、(割註) 晋泰始元年十二月晋王司馬炎、受魏禪、即皇帝位、奉魏主曹奂、為陳留王。亦是漢魏陳

留に験あり。(割註) 初獻帝為陳留王、及即位、受制於曹操、操之後、亦受制於司馬氏、其及篡立、此其応報歟。」

(巻二)

『史記』や正史『三國志』などの「史伝」をふまえ、馬琴は漢や魏の国家滅亡の「験」として、「陳留王」を見出す。陳留王に漢の滅亡を読み取るわけである。この考え方と通ずる記述が、毛注本『三國志演義』に見える。先に引用した原文(五一頁上段)を御覽頂きたい。傍線部②直後の割註部に、「螢」について、「炎倒之勢昔如日月。今為螢光火徳衰矣」とある。漢王朝の初期、「火徳」は「日」のごとき勢いであつた(例えば、夢梅軒章峯作『通俗漢楚軍談』〔元祿三年序〕巻之一において、秦の始皇帝は二人の童が「紅の日輪」を奪い合う夢を見る。この様子は、後に起こる楚の項羽と漢の劉邦との争いを示唆しており、七十二度段られるも最後の一打で勝利し、「日輪」を持って帰つた童が劉邦であろう。「日輪」は漢の「火徳」としての強さも表している)。だが、漢王朝末期の少帝と陳留王、就中、後に獻帝となる陳留王には、「螢火」のごとき輝きしかなく、「火徳」である漢の衰微を示す、と註が付く。毛注本『三國志演義』第三回冒頭には、「天子者。日也。日而借光於螢火。不成其為日矣」という評もあり、陳留王の「火徳」は「螢」の力を借りなければならぬ程に衰えている、とも説明される。

『玄同放言』の記述や毛注本『三国志演義』の注や評をふまえる
と、『俠客伝』の「蜚」も、『三国志演義』と同じ機能を有すると考
えられる。つまり、「火徳」である南朝の衰微である。『俠客伝』第
五回に、新田貞方と従者畑時種が、とある庵で二羽の鶏が闘う様を
見る。その闘鶏を見た妙算は、赤鶏を「南方」（南朝）、黒鶏を「北
方」（北朝）に見立て、黒鶏が勝つたことを「南方火徳」が「北方
水徳」に敗れると、五行説をふまえて解した。このように、闘鶏に
よって「南朝」の衰微が示されるわけであるが、小六丸を誘う
「蜚」の趣向においても、その兆しを表す工夫が施されている。

だとすれば、『俠客伝』の「蜚」には『三国志演義』の漢の衰弱
が二重写しになっており、そのことにより、共に「火徳」である漢
と南朝とが滅ぶ意が含まれる、と考える。単に趣向を借りるだけ
なく、物語の構想を示唆する働きを持っているといえよう。

三

「蜚」の場面は、毛注本でいえば第三回に描かれ、『俠客伝』も同
様に第三回という序盤である。すなわち、『俠客伝』の序盤から
『三国志演義』の様相は賦与されている。

しかし、『三国志演義』は、曹操の台頭、漢王朝の衰微にあつて、
その時流に抗う者たちを中心に描く。それが蜀の劉備であり、諸葛

孔明であった。本節では、補正成の孫、補姑摩姫に仙術を教えた九
六媛という仙女に、孔明の形象が利用されていることを述べる。

『俠客伝』第二十二回、九六媛に仙術を学ぶ姑摩姫は、足利義満
を討つ機会を待っていた。義満を早く討ちたい姑摩姫は、九六媛に
会いにしばしば仙閣に赴くが、九六媛は不在である。

① (姑摩姫は―論者補) 次の日は未牌時候より、……時を移さず
葛城なる、仙観に来にければ、多豆と知止満と出迎へて、一姫
上などで遅かりける。我師はきのお還り給ひて、おん身を等て
をします。卒給へ」とていそがせば、姑摩姫歛^②ひ且羞て、
掖^③れて奥にぞ赴きける。然けれども九六媛は、曲景に脇を倚
掛け、紋紗の团扇を顔に翳して、仮寐して死灰に似たり。姑摩
姫は這光景に、「折夕かり」と思ふのみ、呼覚さんはさすがに
て、等こと約莫半响あまり、九六媛やうやく頭を擡^④げて、声
朗に誦するを听けば、

俠概推^⑤推古劍仙。忠魂雪恨只香煙。

誰知勇士生奇女。隻手能翻宿世冤。

恁吟じつ、身を起せば、

(第二十二回)

『俠客伝』の特徴は、次の五点にまとめられる。すなわち、①姑摩
姫は九六媛をしばしば訪ねるが、九六媛は不在である、②何度目か
に赴くと、九六媛が帰ってきている、③九六媛は「仮寝」している、

④姑摩姫は九六媛を起こすのも悪いと思ひ、起きるのを待つ、⑤約半時してから、九六媛は目を覚まし、詩を吟ずる。

本場面は有名な「三顧の礼」の場面に基づく。劉備は徐庶に孔明を推薦されてからというものの、足繁く孔明の庵を訪ねる。しかし、①一度目も二度目も孔明は留守。なかなか孔明に会えない劉備だが、諦めずに三度訪問する。『通俗三国志』卷之十五「定三分」孔明出「茅廬」は、そのときの様子を次のように描く。

玄德の曰、「又仙童を勞せしむ、我來れるを報じ玉へ。」童子申しけるは、「先生家に居玉へども、今草堂に昼寝して未起。」

玄德の曰、「必ず驚しむべからず、関羽、張飛は門外にて相待。」とて、只一人内へ入り其辺を見玉へば、自然に風色幽雅なり。堂上には、孔明几席の上に、安臥しければ、階下に又手

して立玉ふ。……玄德は一時あまり立て、堂上を見玉へば、孔明寝反して起んとせしが、又壁に朝て睡れり、童子進で起さんとしけるを、玄德又推とせめ、已に二時ばかり立つて、全身

倦疲玉ふ所に、孔明忽ち醒て、詩を吟じて曰、

大夢誰先覺 平生我自知
草堂春睡足 窗外日遲々

吟じ了りて身を翻し、

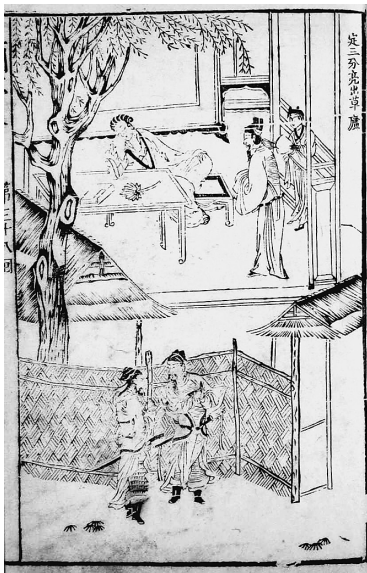
(卷之十五)

この場面の特徴は、①劉備は二度孔明を訪れるが、孔明は不在、②

三度目に庵に赴くと、孔明は帰つてきている、③孔明は仮眠している、④劉備は起こしては悪いと思ひ、孔明が起きるのを待つ、⑤約二時してから、孔明は目を覚まし、詩を吟ずる、である。細かく見ると差異もあるが、『俠客伝』の特徴と共通する。

差異の一つが、仮眠時の体勢である。孔明は「安臥」、九六媛は「曲象に肱を倚掛」けて仮眠している。だが、李卓吾本『三国志』口絵には、肘をついて仮眠する孔明が描かれ、孔明の前には团扇もある(図版Ⅰ)。馬琴が李卓吾本を閲した確実な確証は得られないが、こういった孔明のイメージが存したのかもしれない。⑬

もう一つの差異が、それぞれが吟ずる詩である。九六媛は、



〔図版Ⅰ〕 李卓吾原評「三国志」(72才)
(早稲田大学図書館所蔵)

俠概けいはく惟推古ひな劍仙けんせん 忠魂ちゅうこん雪恨せつこん只香煙ただかよん。

誰知たれか勇士ゆうし生奇女せいきよめ 隻手せきて能翻よく宿世しゆくせい冤えん。

と詩を吟じ、一方の孔明が吟ずる詩は、

大夢だいむ誰先か覓み 平生へいせい我自知われしる

草堂そうたう春睡しゆんすい足あし 窓外まどがはら日遲ひぢ々々

である。一瞥して詩が異なることがわかる。

『俠客伝』の七言絶句は、『初刻拍案驚奇』巻十九から採る。「李公佐巧解夢中言 謝小娥智擒船上盜」に、次の詩がある。

俠槩けい惟推古ひな劍仙けんせん 除凶じゆきう雪恨せつこん只香煙ただかよん。

誰知たれか估客こかく生奇女せいきよめ 隻手せきて能翻よく兩姓りやうせい冤えん。

(男らしいは昔の劍仙。恨みを晴らすは香煙の女。誰が知る、商人の娘は。一人で二姓の仇を討った。)

『俠客伝』の詩が『初刻拍案驚奇』に拠ることは明らかであろう。ただし、『俠客伝』では傍線部の「除凶」を「忠魂」に、「估客」を

「勇士」に、「両姓」を「宿世」へと変更する。この違いは「初刻拍案驚奇」の内容と関係する。「李公佐巧解夢中言 謝小娥智擒船上盜」の梗概を以下に示す。

唐の開元年間のこと、予章郡の謝小娥は、巨商の父と夫を鉛陽湖口で殺された。夢に父と夫が現れて、犯人はそれぞれ「車中猴、門東草」と「禾中走、一日夫」であると言ったが、この謎が解けな

った。のち洪州の判官であった李公佐が、申蘭と申春であると解いてくれた。申蘭の家を探しあてた謝小娥は、名を謝保と偽り、男装して傭工となって住み込んだ。ある日、弟の申春が訪れ、申蘭は酒宴を開き、二人は泥酔した。小娥は申蘭を斬り、申春を捕えて郡役所につき出した。申春は処刑され小娥は旌表された。

女性がたった一人で仇を討つ、という構成において、姑摩姫と謝小娥とは共通する。しかしながら、身分や仇との因縁がそれぞれ異なる。そこで馬琴は、『初刻拍案驚奇』の詩を『俠客伝』に対応させた。「估客」は「商人・あきんど」の意。商人の娘である小娥とは異なり、姑摩姫は足利義満の命を狙った「勇士」楠正元の娘であった。よって「估客」から「勇士」に変更したのである。また、小娥は父親と夫の二人の仇を討つため「両姓冤」とされるが、姑摩姫が討つた仇は、先祖から数代に渡つての因縁である。そのため、「宿世」の仇へと変更したと考えられよう。

以上の検証から、九六媛の詩に『初刻拍案驚奇』を用いて『俠客伝』に対応させる変容が見られるものの、姑摩姫が数度九六媛を訪ね、会えた時には九六媛が仮寝をしており、起きてから詩を吟ずる趣向は、『三國志演義』から借りきたことが確認できる。

さて、ここで注目したいのは、『三顧の礼』——孔明が仮眠——孔明の詩吟——孔明の天下三分の計、という展開である。孔明

は目を覚ました後、三度も訪ねてくれた返礼として、劉備に「天下三分の計」を授ける。この「三顧の礼」から「天下三分の計」に移るプロットが、九六媛に重ねられている可能性がある。というのも、『俠客伝』も同様に、九六媛は詩を吟じた後、南北朝争乱の「宿因」を姑摩姫に語り始める。つまり、九六媛を訪ねる——九六媛の仮眠——九六媛の詩吟——九六媛による南北朝争乱の説明、という展開なのである。九六媛の台詞の大部分が、新井白石『讀史余論』に基づくことは既に指摘される。その一部に、

虎狼野心の本性を見し、陡地反逆に荷担して、尊氏が股肱と做りたる、行状爪弾を做すに堪たり。然ば宋の儒者、朱熹の言に、「人は只曹操が、漢賊なるを知れるのみ。孫権も亦漢賊なるを、知らず」といひしに異ならず。(第二十二回)

とある。尊氏の臣赤松円心を評した箇所であるが、「曹操」を「漢賊」とする記述を載せ、さらに尊氏については、

尊氏・義詮が做す所、北朝に忠あるにもあらず、只国賊といはれぬ与に、立まらせし君なれば、君臣の名はありながら、万機の政事は毫ばかりも、御ころに儘せ給はず、是より王室卑うして、風俗陵夷に及びし事、歎くにもなほあまりあり。

(第二十二回)

と述べる。九六媛は曹操を「漢賊」と見なし、また尊氏については、

尊氏が周囲から「国賊」と言われなかったために北朝を立て、君臣とはいいながら君を蔑ろにしていると批判する。曹操を「漢賊」と見なすのは、馬琴の中編読本『昔語質屋庫』（文化七年刊）巻之二にも、「魏は漢の賊なり」という記述が見え、馬琴は曹操を「漢賊」と見なしていた。また、毛注本『三国志演義』第三十八回の冒頭の評にも、「孔明既云曹操不可与争鋒。而又曰中原可図。其故何哉。蓋漢賊不兩立」とある。この記述は「天下三分の計」の場面に對する評であるが、ここでいう「漢賊」とは曹操を指そう。

さらに、『玄同放言』巻二「漢火生剋應驗弁」には、次の記述が載る。

○孔明誠忠、務漢賊を伐にあり、二表三出、軀も亦いたく疲勞たり、志遂すといふとも、遺策魏延を誅戮し、此魏を以、彼魏に代ゆ、事に益あるにあらねど、魏を平る志一なり、天その忠を慰するといはん歟。(巻二)

馬琴は孔明を「誠忠」の人物、「漢賊」を伐つ役割を持った、漢の正統を守り抜いた人物と考証する。

これらの考証や馬琴の理解、用いた『三国志演義』のプロットをふまえ、『俠客伝』を見直せば、『三国志演義』の持つ機能が『俠客伝』の描き出そうとする歴史解釈や人物像と通ずることがわかる。すなわち、『三国志演義』の趣向を利用し、曹操を「漢」の「賊」

と見なす孔明の形象を重ねることで、「国賊」の足利氏を伐たんとする姑摩姫や九六媛に孔明の「誠忠」を賦与し、南朝を守る正当性を描出したと解すことができるのである。

四

『狭客伝』第二十六回、姑摩姫は足利義持の暗殺を企み、一休法師に捕らえられる。姑摩姫の故郷河内を領分にする畠山満家は、姑摩姫が赦され、自分の領地に帰ることが後々の患いになることを危ぶみ、獄舎にいる姑摩姫の殺害を図る。その様子は、

① 訟獄司に旨を示して、首を撃せんと欲せしに、姑摩姫は仙骨あり、且活人草を服したる、神効により、その刃、或は折れ、或は曲りて、那身を戕ふこと克はず。「然らば絞殺せ」とて、二三回絞らせしに、布まれ索まれ、皆断離て、殺すことを得ざりしかば、満家驚き、且怪みて、又鳩毒を用ひしに、それすら験なかりしかば、「原来那奴は、神仏の冥助ある、盛久・景清の儔ならん。食を禁めて乾枯せ」とて、その日より一たびも、水だに与へざりけれども、姑摩姫は自若として、饑渴の気色なかりけり。

(第二十六回)

とある。特徴として、①獄卒に姑摩姫殺害を命じる、②姑摩姫を斬ろうとした刀は、折れたり曲がったりする、③姑摩姫を縊ろうとす

『開卷驚奇俠客伝』と『三国志演義』

るが、布や縄がちぎれる、④飢えさせようとして、食や水も与えないが、姑摩姫の様子に変化はない、の四点をあげられよう。満家の命を受けた獄卒は、あらゆる手段で姑摩姫を殺害しようとするが、仙骨を持ち、活人草を服した姑摩姫を害することはできない。

右の姑摩姫の様子も、『三国志演義』に登場する仙人左慈を素材とする。ある時、曹操の前に左慈という仙人が現れる。左慈は自らが得た天書を曹操に与えるため、曹操を修行に誘いに来た。しかし、左慈の言葉に激怒した曹操は、左慈を牢に入れて拷問する。『通俗三国志』卷之二十九「魏王宮左慈擲鉢」を示す。

① 曹操怒て曰、「奴は是玄徳が方の間者なるぞ。急で拷問せよ。」と下知すれば、左慈手を撫て大に笑ふ。数十人の獄卒共来り集まり、左慈を搦めて、皮肉の微塵に成るほど撃たりけるに、左慈敢て痛める色なし。怪で能々見れば、熟く睡入て駒の音雷の如し。曹操あまりに興を醒して、③ 鐵の枷を首に入れ、鎖を以てよくくどざし、送て牢に入れけるに、忽ち枷も鎖も紛々として悉く落ち、左慈地上に臥たりければ、曹操大いに怒り、④ 晝夜七日が間飲食を与へず、椽々に責めけれども、左慈地上に端坐して、顔色つねよりも猶壮なり。

(卷之二十九)

まとめると、①曹操は左慈の拷問を命じる、②左慈は拷問されるが、

痛めた様子はない、③鉄の枷をつけるもすぐに粉々になる、④七日間飲食させないが、顔色は変わらない、となる。斬ると打つとの違いはあるが、物理的な攻撃にも、飲食を止める拷問にも顔色を変えないといった様相は、姑摩姫と左慈とで共通する。

『俠客伝』執筆と近い時期に著した「半間窓談」に、「道士徐神翁酒宴の席上に来臨して、詩を賦し仙術をあらはす、その為体、三國の時の左慈に似たるのみ」^⑩とあり、また『俠客伝』三集執筆直後の「三遂平妖伝国字評」にも、「幻術あるものに肢體不具なるも尠からず。三國の左慈がごとき、癩足にしてその術高かり」とあることから、馬琴が左慈について詳しくあったことは察せられる。

ではなぜ、姑摩姫に左慈の様相を用いるのか。左慈は陳留王や孔明のように、「火徳」である漢に属するわけでもなく、劉備に従うわけでもない。だが、馬琴が自作品に描く登場人物とそのモチーフとする人物との善悪を対応させることを考えれば、馬琴には左慈を利用したのにも何かしらの意図があるろう。毛注本『三國志演義』第六十八回冒頭の評には、「于吉未得爲仙若。左慈之仙則眞仙耳」とある。『三國志演義』では、左慈の他に于吉という仙人が登場し、呉の孫策のもとに現れるが、孫策に殺されてしまう。毛評は、そのような于吉と左慈とを較べ、左慈を「眞仙」とした。九六媛に教わった仙術を使い活躍する姑摩姫に、「眞仙」としての性質を賦与し

た可能性が、まず一つとして考えられる。

論者は他に、左慈の趣向利用を、『俠客伝』の南朝正統論に『三國志演義』の「正閏論」を重ね合わせた工夫と考える。『三國志演義』の「正閏論」や白石『説史余論』と『俠客伝』との関係は、前掲の徳田論文や大高論文に詳しいが、『説史余論』に記される日本の史実に『三國志演義』の理念を緋い交ぜにして、さらにそれを『三國志演義』の趣向を通じて描出するのである。満家が姑摩姫の殺害を図るようになったいきさつは、姑摩姫が足利義持を暗殺しようとしたことに始まる。一休法師に捉えられた姑摩姫は、將軍の義持を罵るが、姑摩姫の台詞には次のようなものがある。

「……義に太上天皇山後は、世を憐愍の歡慮深く、当時足利義満が、請稟せし義を勅許ましくて、数个条のおん約束を定められ、即便三種の神器を、当今に渡し給ひて、御受禪の義を行れしに、義満も義持も、虎狼の心を改めず、初の誓に背きまつりて、今までも小倉宮を、東宮に立まらせず。この故に南朝の、忠臣義士は、齒を切りて、義満・義持が誕妄権詐を、恨み怒らざるはなし。……快々頭を刎給へ。世に在る程は忘る、隙なき、梟惡無慙の大逆賊、終には思ひ知らせんず」

姑摩姫は、義満も義持も南朝と北朝それぞれの天皇を順々に即位させ

(第二十四回)

せる約束をしたにもかかわらず、小倉宮を東宮に立てないことに怒り、今夜義持を暗殺にきた、と述べる。

一方、『三国志演義』で、左慈が曹操を激怒させたのは、次の言葉を吐いたためであった。『通俗三国志』卷之二十九、

「蜀の劉玄德は、漢の天子の宗親なり。汝なんぞ此人に位を譲りて、身を安く保たざる。若これに順はずんば、我いま剣を飛ばして必ず汝が首を取らん。」（卷之二十九）

左慈に仙人になるための修行に誘われた曹操は、自分の代わりに政治を治める者がいないことを理由に、左慈の誘いを断る。左慈は曹操に対し、劉備は「漢の天子の宗親」であり、その劉備に位を譲り政治を任せればいい、もし従わなければ曹操の首を取る、とまで言い放つ。劉備が漢の正統であることを、曹操に直言するわけである。これは、小倉宮を東宮に立てないまま、足利氏が権力を牛耳っていることに姑摩姫が憤り、義持に対して直言する様と通ずる。

かつ、左慈が登場する第六十八回（『通俗三国志』卷之二十九）で、曹操が魏王に即位することも関係していよう。『通俗三国志』に、「帝已」ことを得ず、鍾繇に命じて詔書を草せしめ、曹操を冊き立て魏王に封じ玉ふ。（卷之二十九）とあるように、曹操は献帝に有無を言わせず自分を「魏王」に封じさせる。足利氏が天皇を蔑ろにする態度と、小役人出身の曹操が帝を蔑ろにして、王位を強要

する様とは共通しよう。国の違いから、「天皇」と「皇帝」という差異はあるものの、位の高い人物を蔑ろにして権力を握るという点において、義満・義持と『三国志演義』の曹操とは重なる。その曹操の「首を取らん」とした左慈を姑摩姫に重ねること、足利氏に曹操の形象が間接的に印象づけられる。つまり、『読史余論』の記述だけでなく、曹操を篡奪者、劉備を正統とする『三国志演義』に流れる理念を、趣向を通じて、『俠客伝』では「南朝」を「正統」、足利氏を「逆賊」として形成するのである。

姑摩姫が仇討ちを試みる趣向自体は、実録「明智光秀養女盛姫之伝」に拠る。しかし、明智光秀の養女盛姫が、姑摩姫のような拷問を受ける描写はない。また、『俠客伝』の執筆時、左慈の登場場面を載せる毛注本『三国志演義』下巻は馬琴の手元にはなかった。したがって、必ずしも毛注本を馬琴が参照して、本場面が形成されたと述べるつもりはない。だが、単なる表層上の趣向としてではなく、その奥底にある理念や思想、行為の意味をふまえて素材を用いる、という可能性を無視することはできない。

五

以上、『俠客伝』と『三国志演義』との関連を述べた。『三国志演義』では、献帝となった陳留王が曹操の暗殺を数度試みる。成功は

しなかったが、陳留王は曹操を漢の篡奪者として見ていた。同様に、孔明と左慈も曹操を「漢賊」と認識する。そのことを看取した馬琴は、『三国志演義』の趣向を重ね合わせることで、足利氏に対抗する南朝遺臣を描出した。「正閏を正しく」という、『三国志演義』と通ずる『俠客伝』の大意に読者が気づくヒントとして、馬琴は作品内に『三国志演義』の趣向を提示していたのである。²⁴⁾

さて、本稿で述べてきたように、馬琴は『三国志演義』の趣向を利用するにしても、一つのテキストに拠るのではなく、割註の記述なども取り入れ、渾然とした『三国志演義』の世界を『俠客伝』に重ねている。さらにいえば、その手法は『三国志演義』だけにとどまるものではない。馬琴は様々な典籍・資料・伝承・実録を用いながら、かつ、馬琴が培った考証や批評をふまえながら、『俠客伝』を紡ぎ出す。論者はこれまでに、『俠客伝』といくつかの中国小説（『封神演義』『通俗武王軍談』『水滸後伝』）との関連を述べてきた。²⁵⁾ そこでも触れたが、馬琴は『封神演義』『通俗武王軍談』などの殷周革命を題材にした中国小説を利用する際においても、それ単体というよりは、緋い交ぜにして利用する。²⁶⁾

では、そういった馬琴の方法により、『俠客伝』はどのような世界になっているのか。例えば『封神演義』で善側に属す周王朝や、本稿でとりあげた漢王朝は、五行説では南朝と同じ「火徳」である。

「火徳」の共通点を持つ素材から趣向や人物造型などの要素を借り、また『説史余論』の歴史解釈をふまえ、『俠客伝』の大意を描き出すことにより、後南朝を物語背景とする『俠客伝』の裏に、古代中国で「正閏」を守り続けた人物達やその歴史を読み取ることができる。『俠客伝』の重層的な世界が形成されるわけである。

右にあげたのは一例に過ぎないが、このように、従来の研究によって指摘された素材を総括した上で、『俠客伝』という長編読本の総体に迫る必要がある。今後の課題としたい。

注

- ① 「八犬伝九輯再評・俠客伝四輯評」に、「又俠客伝は、やうやく三四編つゞき候のみにて、末々の趣向詳ならず。且作者の大意南北朝の正閏を正しくして、世の蒙昧に順逆を知らしめんとて、作り設たる物なれば、理論も多く……」とある。「八犬伝九輯再評・俠客伝四輯評」は『馬琴評答集』（八木書店、一九七三年三月）に拠る。
- ② 『日本近世小説と中国小説』（青裳堂書店、一九八七年五月）。
- ③ 「馬琴読本における中国古代小説受容の方法」（『馬琴読本と中国古代小説』、溪水社、二〇〇五年一月）。
- ④ 『江戸文学と中国文学』（三省堂、一九四六年五月）。
- ⑤ 新日本古典文学大系87『開卷驚奇俠客伝』（岩波書店）に拠る。
- ⑥ 『四大奇書第一種』（同志社大学図書館所蔵本）に拠る。『凶像三国志演義第一才子書』（文盛書局）も参考にした。
- ⑦ 『通俗二十一史』（早稲田大学出版部）に拠る。適宜、旧漢字を新漢字

に、句読点を改めた。また、濁点と鉤括弧を付した。

⑧ 日本古典文学大系60『椿説弓張月 上』（岩波書店）に拠る。

⑨ 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』（岩波書店）に拠る。

⑩ 注①に同じ。

⑪ 得九智子「姑摩姫の仇討——『侠客伝』の女伏論——」（『読本研究新集 一』、一九九八年二月）は、「螢火が、夢とも現とも区別のつかない幻想的な情緒を醸し出し、これから起こる不思議な出来事への導き役を果している」と述べる。

⑫ 日本随筆大成編輯部『日本随筆大成（第一期）5』（吉川弘文館、一九九三年八月）に拠る。

⑬ 馬琴が所蔵した上図下文形式の簡本『新刊京本校正演義全像三国志伝評林』における当該箇所を図には、寝て、べつて仮眠する孔明の姿が描かれる。

⑭ 『初刻拍案驚奇 二』（ゆまに書房、一九八六年九月）に拠る。

⑮ 辛島驍訳『拍案驚奇』（東洋文化協会、一九五九年）を参照した。

⑯ 小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社、一九八一年二月）を参照した。

⑰ 大高洋司「『開卷驚奇侠客伝』の骨格」（注⑤所収）。

⑱ 拙著蔵本に拠る。

⑲ 「半間窓談」は柴田光彦編『馬琴評答集 五』（早稲田大学蔵資料影印叢書刊行委員会、一九九一年九月）に拠る。

⑳ 「三遂平妖伝国字評」は『馬琴評答集 五』（注⑱既出）に拠る。

㉑ 建部被足作『本朝水滸伝』（明和一〇「二七三」年刊）を批評した『本朝水滸伝を読む并批評』（天保四年成立）で、馬琴は、作品内の人物造型において、史上の人物とモチーフとした人物の善悪を対応させない、と、「看官の虫貞」がつきにくいと評す。本文は早稲田大学図書館蔵

（古典籍総合データベース）に拠る。

㉒ 「『侠客伝京師淀新評』に「姑摩姫の行状、光秀の女に似て換骨也」とある評も、知音の評にははずして、この人独よく見たり」とあり、「盛姫之伝」と『侠客伝』との関連に言及する。「『侠客伝京師淀新評』は、『馬琴評答集 五』（注⑱既出）に拠る。徳田武「後南朝悲話——庭鐘・馬琴・逍遙」（注②所収）も、「『侠客伝京師淀新評』を受け、両書の関連を詳細に検証する。なお、「明智光秀養女盛姫之伝」は静嘉堂文庫所蔵本に拠った。

㉓ 天保三年七月朔日付殿村篠斎宛書翰に、「就中、亥年の七月の火事ハ、旧宅のうら迄やけ込候故、書籍紛失も多く候ひキ。……『演義三国志』

毛注の大本も、其節下帙紛失、只今は上帙斗有之候」とある。書翰は柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』（八木書店）に拠った。神田正行「曲亭蔵書の形成過程——「東岡舎蔵書目録」と「曲亭購得書目」——」（『馬琴と書物——伝奇世界の底流——』、八木書店、二〇一一年八月）は、「曲亭蔵書目録」の記述をふまえ、馬琴が所蔵した毛注本は元々欠本であった可能性を指摘している。神田論文の述べるのとおり、馬琴が下巻を所蔵することがないのか、あるいは本当に火事で失ったのかは判断としないが、いずれにせよ、『侠客伝』執筆時に毛注本の下巻は、馬琴の手に無かったと考えてよい。

㉔ 注①で触れた馬琴の自解には、『侠客伝』の大意になかなか言及しない知友に対し、馬琴が業を煮やしたという経緯がある。

㉕ 拙稿「馬琴読本『開卷驚奇侠客伝』論——『封神演義』『通俗武王軍談』との関連を中心に——」（『日本文学』第59巻第2号、二〇一〇年二月）、拙稿「馬琴読本『開卷驚奇侠客伝』論（二）——『封神演義』『通俗武王軍談』との関連を中心に——」（『同志社国文学』第72号、二〇一〇年三月）、拙稿「馬琴の白話小説批評と読本——「半間窓談」から

『俠客伝』へ――」（『日本文学』第60巻第12号、二〇一二年二月）で、中国白話小説との関連や、馬琴自身の白話小説批評の応用が見られることを論じた。

②⑥ ②⑤拙稿に加え、近時、大高洋司「曲亭馬琴と「武王軍談」」（『日本語文化研究』第四輯、二〇一一年九月）も、『八犬伝』における馬琴の素材利用の方法として、類似した見解を示す。

〔付記〕 図版の掲載許可を賜りました早稲田大学図書館に、深謝申し上げます。